



2023年10月 第21巻 第10号

…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

かく語りき—聖人の言葉

今月の目次

聖典を学びすぎると、よいことよりも害の方が多くなるのだよ。大事なことは、聖典の本質を知ることだ。その後に書物は必要なくなる。神を悟るためには、本質を学び取り、深く潜らなければならない。

- かく語りき—聖人の言葉
- お知らせ
- 2023年12月の生誕日
- 2023年
- 忘れられない物語
- 今月の思想

…シュリー・ラーマクリシュナ

お知らせ

仕事を通じてのみ、仕事の束縛を取り除くことができます。完全な無執着は後からやって来ます。たとえ一瞬でも働かないのはいけません。仕事は、無駄な考えを避けるのに役立ちます。

各プログラムに参加を希望される方はご一報ください。

…ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー

• 日本ヴェーダーンタ協会の行事予定はホームページをご確認ください。

<https://www.vedantajp.com/>

2023年12月生誕日

「あなたの目の前にある川の大量の水が刻々に移動し、新しい水がやってくるが、川の形は変わらない。この肉体もそれと同じである」 それでも、肉体は強く健康に保たなければなりません。肉体は私たちが持つ最高の道具です。

スワミー・プレーマナンダ
12月21日（木）
クリスマス・イブ
12月24日（日）

2023年8月20日シュリー・クリシュナ
生誕祝賀会 午前と午後の部
「シュリー・クリシュナの生涯と教え」
スワーミー・メーダサーナンダ

ご存知のように、本日私たちはシュリー・クリシュナの生誕をお祝いしていますが、本当のシュリー・クリシュナの誕生日は来月です。皆さんの多くはシュリー・クリシュナとその神聖な遊びについてご存じでしょうが、簡単にシュリー・クリシュナの生涯を説明します。

シュリー・クリシュナの生誕がいつであったかということについては、いくつかの意見があることはともかく、降誕なさったマトゥラ王国は、カンサという暴君が統治していました。カンサの父ウグラセナが本当は王位にいたのですが、王になりたかったカンサは父を投獄し、自らが王になりました。カンサにはデーヴァキーという妹がいました。デーヴァキーとヴァスデーヴァの結婚式の最中に、「デーヴァキーとヴァスデーヴァの8番目の子供がカンサを殺すだろう」と天から予言がありました。これを聞いたカンサは二人を牢屋に放り込みました。8人目の子供が生まれるとすぐに殺すためです。

ついに8人目の子供が誕生しました。ヴァスデーヴァの息子はヴァースデーヴァと名付けられました。赤ん坊は生

まれてすぐに両親に向かって、「ああ、お父さん、お母さん！ もう悲しまないでください。私が父さんと母さんをカンサの暴虐から自由にしてあげますから。お父さん、ゴクラ村に住んでいるナンダの家に、私を連れて行ってください。ナンダの妻が今、女の子を生んだところなので、僕とその女の子を交換してください」と言いました。赤ん坊がそう言うと、牢屋の門が勝手に開きました。門番たちは眠りこけていました。一晩中、雨でしたが、ヴァスデーヴァは指示どおりに息子を抱いて、ゴクラ村のナンダの家に着きました。そこではナンダの妻ヤショーダーが生まれたばかりの女の子と一緒に寝ていました。ヴァスデーヴァは密かにその女の子を自分の息子と交換し、女の子を腕に抱えて牢屋に戻りました。

こうして、クリシュナはナンダとヤショーダーの家庭で育ちました。『シュリーマッド・バーガヴァタム』には、クリシュナが少年、青年時代に遊んだ神聖な遊びの逸話が載っています。クリシュナは悪魔を数匹退治しました。牧女や牛飼いの少年たちとの遊びの話があります。クリシュナが成長すると、兄のバララームと共に暴君カンサを殺害し、カンサの父ウグラセナを王位に戻しました。その後、シュリー・クリシュナは西インドのドワーラカーに移り、そこで王国を設立し、ヤーダヴァ族の統治者となりました。その後のカ

ウラヴァ族とパーンダヴァ族のクルクシェートラの戦いでは、自分は戦わないと決意していましたが、アルジュナの願いでアルジュナの御者となりました。両者には偉大な戦士たちがいましたが、シュリー・クリシュナが何度もタイムリーな助言をしてパーンダヴァ族を助けたので、最終的にはパーンダヴァ族がクルクシェートラの戦いに勝利しました。

戦争が始まる直前、アルジュナは敵の中に親戚、親しい人たち、恩師、心から尊敬する多くの高名な戦士たちがいるのを見て、もし自分が戦えば彼らの多くを殺してしまうと恐れ、「私は戦いません」と言いました。シュリー・クリシュナがアルジュナに、クシャトリヤ（戦士のカースト）としての義務を果たすよう長い説教をしたのは、その時のことです。その説教は『バガヴァッド・ギーター』として知られるようになりました。クルクシェートラの戦いが終わった後、カウラヴァの側に立った多くの暴君や邪悪な心を持った人々が殺されました。パーンダヴァ族の長男であるユディシュティラは、大きな困難に陥ったときも、いかなる状況下でも正義の道を貫きました。そしてその戦いの後にユディシュティラが王になりました。こうして、「宗教の保護と悪の滅亡」というシュリー・クリシュナの使命は具現化したのです。

さて、シュリー・クリシュナは人生の大事な使命を達成したと感じたので、肉体を放棄することにしました。そうこうしているうちに、シュリー・クリシュナの親族ヤーダヴァ族は非常に混乱しました。彼らは内輪で争い、そして滅びました。シュリー・クリシュナはそのことには介入せず、起こるに任せました。その後、シュリー・クリシュナはこの世を離れる準備ができました。ある日、彼が木の下で休んでいると、狩人が遠くから誤って彼の足に矢を当ててしまいました。シュリー・クリシュナはこれを穏やかに受け入れ、数日後に肉体を去りました。

次に、彼の教えについて考えてみましょう。シュリー・ラーマクリシュナは、「偉大な宗教の指導者たちは、弟子の能力に応じて教える」と言いました。彼らはすべての弟子に同じ助言や教えを与えたわけではありません。彼らは常に弟子一人一人の適性、能力、器量を考慮して指導しました。

信者に関していうと、シュリー・クリシュナには三つのタイプの信者がいました。一つはパーンダヴァ族タイプ、もう一つは霊的生活に大きな興味を持ち、熱心に霊性の修行に打ち込んだウッダヴァ・タイプ、そして3番目は、ブリンダーヴァンの牛飼いの少年と牧女タイプでした。彼らの性質を学ぶと次のことが分かります。パーンダヴァ

族は主にラジャスを持っていたが、サットヴァの要素も持っていました。2番目のタイプはサットワが優勢で、ウッダヴァのように霊的实践を熱心に行いました。ウッダヴァはシュリー・クリシュナの親戚であり、友人であり、信者でした。3番目の牛飼いの少年と牧女のタイプには純粋なサットワが与えられており、ラジャスやタマスが混ざることはありませんでした。

さて、ラジャスが主であるタイプのパーンダヴァ族に対するシュリー・クリシュナの教えを見てみましょう。『バガヴァッド・ギーター』には、彼らのための教えが記されています。悲しみに打ちひしがれ、親戚が相手側にいるのを見て戦いに参加しないと決心したアルジュナを見て、シュリー・クリシュナは次の助言を与えました。

クライツビャン マースマ ガマハ
パールタ ナイタット トヴァイ ウ
パパッヂャデー/ クシュドラン フリ
ダヤ・ダウルバツリヤン テヤクトヴ
オーツティシュタ パランタパ//
2.3

プリター妃の息子 (アルジュナ) よ！
そんな態度は、男らしくもないし、まったく君にはふさわしくない。さあ、弱気を捨てて立ち上がりなさい。敵を撃破する勇者 (アルジュナ) よ！』と。

シュリー・クリシュナはアルジュナに、クシャトリヤの義務として戦いをするように言いました。しかし同時に、義務を果たす際には二つのことに気を付けるようにと助言しました。第1番目は、努力の成果に執着しないことです。『バガヴァッド・ギーター』では無執着について、別の節で説かれています。

タスマード アサクタハ サタタン
カーリヤン カルマ サマーチャラ/
アサクトー ヒ アーチャラン カル
マ パラム アープノーティ プール
シャハ//3.19

故に、仕事の結果に執着することなく、ただ己の為すべき義務としてそれを行いなさい。なぜなら、無執着の心で行動することによって、人は至高の境地に達し得るからである。3.19

仕事に執着すると、欲求不満、失望、それらと同様の否定的な感情など、いくつかの問題を引き起こします。したがって、シュリー・クリシュナの助言は「執着せずに自分の義務を続けること」でした。また彼は、「自分の義務を果たしているときに、常に私のことを思い出するように」と繰り返し助言しました。『バガヴァッド・ギーター』にはこのような節もあります。

タスマート サルヴェーシュ カーレ
ーシュ マーム アヌスマラ ユッタ

ヤ チャ/ マイ アルピタ・マノー・
ブッディル マーム エーヴァイッシ
ヤシ アサンシャヤハ// 8.7

故に、君はいつも私のことを想いなが
ら戦いなさい。心も頭も私にしっかりと
結び付けておきさえすれば、君は疑
いなく私のもとへと到達する。8.7

この節は戦争や戦いを背景に語られて
いますが、一般的な人が人生を歩むと
いうことは、外で多くの問題や困難に
見舞われる戦争と何ら変わりません。
ですから、これらすべての相争う状況
の中でも、神を思い出しながら、自分
の義務を果たしましょう。結果につい
てのシュリー・クリシュナの助言は、
「成功も失敗も、共に主に捧げましょ
う」というものです。『バガヴァッド・
ギーター』には次の一節があります。

ヤト カローシ ヤド アシューナシ
ヤツジュホーシ ダダーシ ヤト/ ヤ
ツ タパッシヤシ カウンテーヤ タ
ット クルッシュヴァ マド・アルパ
ナム// 9.27

君が何をしようと、何を食べようと、
何を供えようと、何を人に与えようと、
どんな修行苦行をしようとクンティー
妃の息子（アルジュナ）よ！ 全てを
私への捧げものとするがいい！ 9.27

そしてシュリー・クリシュナの最も重

要な助言は、『バガヴァッド・ギーター』
の最後の章にあります。

サルヴァ・ダルマーン パリッテヤツ
ジャ マーム エーカム シャラナン
ヴラジャ/ アハン トヴァー サルヴ
ア・パーペーツビョー モークシャイ
ツシヤーミ マー シュチャハ
//18.66

あらゆる宗教の形式を斥け、ただひた
すら私に頼り、服従しなさい。そうす
れば私がすべての悪業報から君を救っ
てあげよう。だから、なんら心配する
ことはない。18.66

次に、シュリー・クリシュナがウッダ
ヴァに与えた教えについて話します。
その教えは『シュリーマッド・バーガ
ヴァタム』の中にあり、『ウッダヴァ・
ギーター』として知られています。ウ
ッダヴァは家住者ではありませんでし
た。彼は霊的な生活を送ることに非常
に心が傾いている隠遁者でした。ウッ
ダヴァは霊的生活についてシュリー・
クリシュナに助言を乞いました。する
とシュリー・クリシュナはウッダアヴ
アを教え導くために『アヴァドゥータ
の物語』を語りました。アヴァドゥー
タは托鉢僧でした。霊的实践だけに専
念する目的で家族と職業を放棄したイ
ンドの僧侶は、サドゥー、サンニヤー
シン、アヴァドゥータなど、さまざま
な名前で呼ばれています。

みなさんはグルの存在をご存じだと思いますが、「ウパグル」という存在もあります。グルは私たちに霊的な指示を与える人です。ウパグルは補助的な霊的教師であり、ウパグルから霊的生活について学ぶことができます。このアヴァドゥータには 24 のウパグルがありました。その話は面白いです。アヴァドゥータは言いました。「私は大地から『許し』を学びました。私たちは水を得るため、鉱物を取るため、建物を建てるために大地を掘ります。しかし、母なる大地はそれに抗議することなく、そうすることをお許しくださっています」

それから言いました「私は『空気』から無執着を学びました。空気は芳香も悪臭も運びますが、その影響を受けません」。さらに、「空気は屋根などで境目を作られることもありますが、『空間』はすべてに浸透しています。同様に、アートマンもすべてに遍在していますが、体、心、エゴなどによって境界があるように見えます」と言いました。つまり、彼は「空間」から、「遍在性」という側面を学んだのです。

「私は『水』からも学びました。水の本性は、透明で、甘く、汚れを浄化します。同じように、賢者も透明な心を持っており、その教えによって他者の穢れを浄化する手助けをします」

次は火です。「私は『火』からも学びました。火は汚物にも汚されません。同じように知識と知恵に満ちた人は、邪悪な人にも汚されません」

「『月』は満ち欠けします。実際の月は、満ちも欠けもせず、同じままです。太陽の光を月が反射して、月が満ち欠けしているように見えるのです。同じように、肉体は成長し、老化し、最終的には死にます。しかし、そのような体の状態に関係なく、アートマンは不変です。私はこのことを月から学びました」

「次は『太陽』です。私は太陽からも学びました。太陽は、川や海などの水場から水を蒸発させます。そのことによって、雲が発生し、雨が降ります。しかし、太陽自体はこのプロセスの影響を受けません。同じように、知恵のある人は多くのことを学び、その知識を他者に分け与えます。しかし知恵のある人が学んだり教えても、利己的になることはありません。彼は自分の知識ゆえに利己的になることはないのです」

「また、私は『太陽』から、水場に太陽が反射しているときには、それぞれの水たまりに太陽の反射していることを学びました。無知な人は太陽がたくさんあると思うでしょう。次に、池や

川に太陽が反射するとき、風の影響で波が立ち、反射が乱れてしまいます。しかし太陽は同じであり、何の乱れもありません。同じように、アートマンが、ブッディ、心、感覚と接触するとき、それらの影響を受けるように見えるため、私たちはアートマンがたくさん存在すると考えます。しかしそうではありません。アートマンは常に一つです」

さらにアヴァドゥータは「ハトの家族」からも学びました。ある時、猟師が仕掛けた野鳥狩りのわなにヒナたちが捕らえられ、抜け出すことができなくなりました。それを見た母鳥は、ヒナへの愛着のあまり、我を忘れて自らわなに入ってしまった。同じように父鳥も家族に愛着を感じていたのでわなに入っていました。この例は、執着がいかにして人を破滅させるかを教えてくれました。

さらにアヴァドゥータは言いました。「私は『虫』から学びました。虫は火の美しさに惹かれて、火に引き寄せられ、火の中に入って死んでしまいます。同じように、男性も女性に惹かれます。そして互いが触れ合うと、そのことが束縛につながります」

「私が『象』から学んだのは、雌象の触感が雄象をとらえる、ということです。猟師が野生の象を獲るときには、

飼いならした雌象をジャングルに送りこみます。その雌象は雄象の鼻を自分の鼻に結わえて猟師が仕掛けたわなの近くまでゆっくりと引っぱってきます。そうして猟師は雄象を捕まえるのです。だから、接触には注意しなければなりません。つまり、ここでは接触の感覚が雄象のトラブルの源となっていますが、この接触は霊性の求道者にとってもトラブルを引き起こす可能性があります！」。このことは大事なポイントです。

「それから私は『ミツバチ』からも学びました。ミツバチは花から蜜を集めて巣を作ります。そして養蜂家はそれらの蜂の巣を直接突きません。それは危険な行為で、ハチに刺されて死に人もいるからです。そこで養蜂家たちは木を燃やして煙を出し、ミツバチを巣から燻し出してから、巣の蜂蜜を集めます。そのことから学んだことは、ミツバチは蜂蜜を集めるために一生懸命働いたにもかかわらず、蜂蜜を楽しむことができず、他の人たちに蜂蜜を奪われてしまうということです。同じように、貪欲な人や守銭奴もお金を節約しますが、そのお金を自分自身や家族のために楽しむことができません」

「それから私は『鹿』から耳の感覚について学びました。鹿は甘美な音楽が大好きです。猟師はそのことを知っているのです。さまざまな笛を吹きます。

鹿はその音楽がどこからきているのか知らずに、音楽をたどっていきます。そして笛を吹いている人間に近づいた時、猟師は鹿を捕らえるのです。同じように、放棄の人生を歩む者は、世俗的な音楽を聴くべきではありません。そうすることで楽しみへの欲望が燃え上がるかもしれないからです」

「また私は『トンビ』から、いいものを持っていると、周りの人がそれを奪いたがるということも学びました。トンビが肉片を咥えて飛び始めると、カラスなど他の鳥がそのトンビを追って、口から肉を奪い取ろうとします。飛んでいるときに突然、トンビが口から肉片を落とすと、カラスはトンビを放っておいて、肉を掴もうと肉の方へ向かいます。そうしてやっとトンビに平和が訪れるのです」

このように、それぞれに例があります。これらはすべて『ウッダヴァ・ギター』の中の話です。ウッダヴァ・ギターには美しい一節があります

デハストハピ ナ デハスト ヴィド
ウワン スワプナド ヤトッティタハ
アデホストハピ デハスタ クマティ
スワプナドリク ヤタ 1.02

それは、夢から目覚めた人が、夢の中の自分を同一視しないように、真我を実現した人は、物質的な体の中に住ん

でいても、自分は体を超越していると思見なします。しかし、愚か者は、物質的な体と同一ではなく体を超越しているにもかかわらず、自分は体の中にいると考えます。それはまるで、夢を見ている人が、自分は夢想の体の中にいると考えるのと同じようです。

シュリー・クリシュナは、この世での使命が終わったと感じたとき、体を放棄したいと思いました。ウッダヴァはシュリー・クリシュナの信者だったので、これを聞いて、とても悲しい気持ちになりました。ウッダヴァはシュリー・クリシュナと一緒にいたかったので、自分も体を放棄したいと思いました。しかし、シュリー・クリシュナはウッダヴァに「いけません、ウッダヴァ、そんなことをしてはいけません。私の死後は、ヒマラヤのバドリカシュラムという場所に行き、アラカナンダー川の近くに居をさだめ、霊性修行をなさいます。心をコントロールし、あらゆる非実在のものから自分を切り離し、『私』に集中なさいます」と言いました。このタイプの助言は、霊的修行だけに人生を捧げたいと願う信者たちに与えられました。ウッダヴァもその一人でした。彼らにとって、果たすべき世俗的な義務などありませんでした。

3 番目のタイプの信者は、ブリンダーヴァンの牧女たちでした。スワームー・プレーマナーンダが東ベンガルで

講演をしていたときの事です。話の途中に聴衆の一人が立ち上がって、「マハーラージ、プレマ・バクティつまり純粋な信仰について何か教えてください」と言いました。マハーラージは最初その人の話に耳を貸さずに話を続けました。するとその人はまた同じことを言いました。今度は、プレーマ・ナンダジーは少し熱気を込めてこう言いました。「プレマ・バクティについて知りたいのですか？ では、一つ逸話を話しましょう。ある行商人の男が家々をまわりながら『プレマ・バクティ！プレマ・バクティがお買い得だよ！プレマ・バクティが欲しくないかい？ほしい人はいないかね？』と大声をあげました。すると一人の客が出てきて、『プレマ・バクティをおくれ。いくらだい？』と尋ねました。行商人は『お代はあなたの切り落とされた頭です』と言いました。私たちの頭が、純粋な愛を得る代償です。もしあなた方がプレマ・バクティを望むなら、頭を差し出さなければなりません。残念ながら、あなた方の中に神聖な愛を持つのに適した者は一人もいないのではないかと思います。神聖な愛を得るためには、頭を差し出す覚悟が必要です。その意味は「私」と「私のもの」という考えを差し出すということです」。それを聞いた聴衆は静かになりました。この逸話の大事な点は、ひとたび自分のエゴから完全に解放されると、プレマ・バクティが現れるということです。

『シュリーマッド バーガヴァタム』には牧女たちのシュリー・クリシュナに対する愛と、シュリー・クリシュナの牧女たちに対する愛が描かれています。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、「体-心という考えがある世俗的な心の人々は、このような文章を読むべきですらない」と言いました。なぜなら、そのような人はこれらの文章のより深い意味を理解できないからです。サンスクリット語で「ヴィラハ」という、ラーダーとクリシュナの別離の苦しみを描いた歌があります。この「ヴィラハ」を描いたキールタンがあります。そのキールタンを聞いて、多くの人が涙を流します。しかし、スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、彼らはクリシュナやラーダーを想って泣くわけではない、と言いました。彼らは自分の連れ合いのことを思い出して泣くのです。男性は自分をクリシュナだと想像し、ラーダーというキャラクターを自分の妻に重ね合わせて泣くのです。確かに、夫婦の関係は霊的なものではなく、世俗的なものです。このように、牧女たちは非常に純粋なタイプでした。彼女たちには肉体意識がありませんでした」。

エカンギ、サマンジャサー、サマルターという三つのタイプの愛があります。エカンギは自分だけの幸せを求めるタイプです。サマンジャサーは、自分自

身と愛する人の幸せを求めるタイプです。そして3番目のサマルターというタイプは、自分の幸せを全く求めず、愛する人の幸せを求めます。

信者もそれぞれのカテゴリーに分類されます。最初のカテゴリーの人は、自分の欲望を満たすために神を礼拝します。しかし、愛のためだけに神を愛する優れたタイプの信者もいます。彼らの動機は主を喜ばせることです。牧女たちはこのカテゴリーです。彼女たちには欲望はおろか、自由すらありませんでした。彼女たちの唯一の動機はクリシュナに仕えることでした。彼女たちは死んでなお精妙な体で生き続け、クリシュナの足が茂みのとげに刺されないようにクリシュナの足元に住んでいると言われています。

当時、周りの人々は、なぜシュリー・クリシュナが牧女たちをそこまで愛しているのかと不思議に思ったでしょう。それに答えるために、シュリー・クリシュナはある策を講じました。クリシュナは病気になりました。医師が診ても誰も治すことができませんでした。クリシュナの世話をしていた信者たちは、「シュリー・クリシュナご本人に、どうすれば治すことができるのか聞いてみよう」と思ったので、直接尋ねました。するとシュリー・クリシュナは、『信者の足の塵を私の頭に乗せれば治る』と答えました。みんな彼の答えを聞いて驚きました。どうしてそんなこ

とができようか、と皆が思いました。シュリー・クリシュナご自身が神なので、皆がシュリー・クリシュナの御足の塵を切望します。シュリー・クリシュナはとても尊敬され、崇拝されていました！ですので、誰かの足の塵をとってシュリー・クリシュナの頭にかぶせるなどということは考えられなかったのです。しかし、牧女たちはこれを聞くと、すぐに自分たちの足の塵を取り、シュリー・クリシュナの頭に乗せることに同意しました。それがシュリー・クリシュナを治せる唯一の薬なら、ためらうことなどなかったのです。このことは、牧女たちがシュリー・クリシュナに対して抱いていた愛の大きさを示しています。これを純粋な愛といいます！シュッター・バクティです！とてもとても珍しいことです。バクティ（信仰）を持つ人はいても、純粋で混じりけのない愛は本当にまれなのです。

純粋な信仰を得ると何が起こるでしょうか？それはこうです：すべての道には三角形の概念があります。ヨーガの論理では、それは「瞑想」「瞑想者」「瞑想の対象」です。

同様に、ギャーナ・ヨーガの実践においては、「ジーヴァートマン」「パラマートマン」「ギャーナ・ヨーガの実践（識別、瞑想など）」が三角形の三つの角をなします。同様に、バクティ・ヨーガ

でも、「バクタ（信者）」「バガヴァーン（神）」「バクティ（神への愛）」が三つの角をなします。さて、ニルヴィージャ・サマーディの時、ラージャ・ヨーガでは、「ヨーギー」「パラマートマン」「瞑想」が一つになります。ギャーナ・ヨーガでは「ジーヴァートマン」「識別」「パラマートマン」が一つになります。同様に、バクティ・ヨーガでも、「バクタ（信者）」「バガヴァーン（神）」「バクティ（神への愛）」が一つになります。シュリー・ラーマクリシュナは「ゴピーたちがパラ・バクティを経験したとき、『私はシュリー・クリシュナ』だと感じていた」とよくおっしゃいました。つまり、彼女たちの「私」意識がシュリー・クリシュナに溶け込んだのです。シュリー・ラーマクリシュナは「信者が十分な信仰を得るということは、神をしぼる縄を手に入れたようなものだ」ともよくおっしゃいました。その人が望めばいつでも神は前にあらわれます。一般的な信者は、長い間霊的实践をした後に、神の慈悲で神のヴィジョンを得るかもしれません。しかしパラ・バクティを得ると、いつでもどこでも神が信者の前にあらわれるのです。なぜなら、神は純粋な信仰に非常に惹かれるからです。だからこそホーリー・マザーは、「私が望めば、いつでもシュリー・ラーマクリシュナのヴィジョンをみることができます」と言ったのです。彼女はシュリー・ラーマクリシュナに対してそれほどの愛を

持っていました。

したがって、シュリー・クリシュナには3種類の信者がいたと結論付けることができます。最初のタイプは家住者で、人生において多くの世俗的な義務を負っています。パーンダヴァ族はそのタイプでした。彼らに対するシュリー・クリシュナの助言は、「心を神にさだめつつ、世俗の義務を続けなさい」「自分たちの行為の成果を神に差し出し、無執着な方法で義務に取り組みなさい」でした。2番目のタイプは、解脱を望み、熱心な精霊的实践を喜んで行う人々です。ウッダヴァはこのカテゴリーでした。彼らに対するシュリー・クリシュナの助言は、「心をコントロールし、識別を実践し、そして神に集中しなさい」でした。3番目のタイプは最高の愛を持つ信者です。彼らに対する助言は何もありません。ただ、信者と神との交わりだけがあるのです。

2023年6月3日スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会

「結びの言葉」

スワミー・メーダサーナンダ

親愛なる皆さま

指定された時間内で、さまざまなヨーガに関するスワミー・ヴィヴェーカーナンダの概念を、自身の観察を通してうまく発表した素晴らしい講演者の

皆様に心からのお祝いを申し上げます。
これは決して簡単なことではありません
でした。

それでは、今日のテーマについて少し
お話したいと思います。

ヨーガは、神聖な、言い換えると理想
的な人生の、目標であり方法です。個
人の適性と能力に応じて実践するそれ
ぞれのヨーガは、同じ目標へと導きま
す。スワミー・ヴィヴェーカーナン
ダの有名な言葉があります。「それぞ
れの魂は潜在的に神聖です。目標は、内
的外的性質をコントロールすること
により、この内なる神聖さをあらわす
ことです。働き、礼拝、哲学のいずれか
一つ、または二つ以上、もしくはすべ
てを実践して自由になってください。
これが宗教のすべてです。教義、信条、
儀式、書物、寺院、神像は二義的な小
事にすぎません」。

スワミーは、1899年の二度目
の西洋訪問中にヨーガの統合について
特に語りました。このことは、ヨーガ
の概念と実践に対する彼の比類なき貢
献です。スワミーは言いました「どうか、すべての人が心の中に、
哲学、神秘主義、感情、および活動と
いうこれらすべての要素が十分に、し
かも等しく与えられますように！そ
れが完全な人の理想です」。四つのヨ
ーガすべての総合は、ヴィヴェーカー

ナンダの宗教の理想でもありました。

彼はまた、ロゴを通じてヨーガのこの
統合を視覚的に表現することを考案し
ました。そのロゴは後にラーマクリシ
ュナ僧団と僧院の紋章となり、一般の
人々に広く知られるようになりました。
スワミーがこのロゴを考案した
経緯は興味深いものですので、次に説
明します。

二度目のアメリカ訪問中の1900年7
月のある朝、スワミーは新しく
設立されたニューヨーク・ヴェーダー
ンタ協会朝食の席についていました。
その時、ヘンリー・ヴァン・ハッゲン
という印刷業者がやってきました。彼
は、「今、ヴェーダーンタ協会のチラシ
を作成中ですが、そこに紋章
を入りたいので、スワミー、何かご
提案していただませんか？」と言
いました。スワミーは受け取った
ばかりの手紙の封筒を裂いて、その真
っ白な内側に、波、白鳥、蓮の花、太
陽、そしてそれらのまわりに蛇を描
きました。スワミーはデザインを
描いた紙片をテーブルの向こう側に
投げ、「正確な縮尺で描いてください」
と言いました。印刷業者のヘンリー
は有能な製図家でもあったので、
その下絵をもとに完成図にしました。

スワミーは、主要なヨーガの総
合をあらわす紋章を何気なく描いたよ

うに見えますが、実際には、そのアイデアは非常に長い間、ご自身の心の中であたためられていました。チラシを急に作らなければならなくなったおかげで、それが具体化したのです。

ヴィヴェーカーナンダご自身が次の言葉でロゴを説明なさいました。波打つ水はカルマを、蓮の花はバクティを、昇る太陽はギャーナを、それらを取り囲む蛇はヨーガと目覚めたクンダリーニ・シャクティを象徴し、白鳥はパラマートマン（至高の真我）をあらわしています。つまり、この絵のアイデアは、カルマ、バクティ、ギャーナ、ヨーガの結合によって、パラマートマン（至高の真我）のヴィジョンが得られるということです。

このロゴの下部には、**तन्नो हंसः प्रचोदयात्**（タンノ ハンサ プラチョダヤト）という言葉も書かれています。これは「至高の真我なるパラマートマン（白鳥が象徴）が、私たちの高次の理解を目覚めさせてくださいますように」という意味です。

スワミーजीの理想的な人間の概念は、生活において四つのヨーガをすべて統合できる人、であることを思い出してください。スワミーजीは、ご自身が設立したラーマクリシュナ僧団の中心地である私たちのアシュラムの毎日のスケジュールを作りました。僧

院の仲間がこれら四つすべてのヨーガを実践することで、調和的に成長し理想的な僧侶となるようにするためです。

ですので、私たちのアシュラムの日常生活では、瞑想を通じてラージャ・ヨーガを、祈りと儀式を通じてバクティ・ヨーガを、聖典の勉強と識別力アップを通じてギャーナ・ヨーガを、そして最後に、神の道具として働き、無私で働くことによってカルマ・ヨーガを実践しています。これらのことは、私たちの霊的实践を容易に、そして興味深いものにし、最終的には私たちを完璧なる道へと導く手助けとなります。

最後に、家住者の皆さんが、完璧な生活とは何か、どのようにヨーガの統合が完ぺきな生活を得る助けとなるかについて、これまで申し上げた話からヒントを得て、それに則して実践してほしい、という希望で締めくくりたいと思います。親愛なる友人の皆さん、瞑想（ラージャ・ヨーガ）、祈り（バクティ・ヨーガ）、バガヴァッド・ギターなどの聖典の勉強（ギャーナ・ヨーガ）を少しの時間、たとえば毎日 30 分程度実践してください。そして、より多くを与え、より少なく受け取るという態度で働いてください（カルマ・ヨーガ）。これらのことを 2 週間実践するだけで、その効果を実感できるでしょう。その結果、そのような実践はあなたの家をアシュラム、つまり「グリハム・

「タポヴァナム」に変えるでしょう。こうして、ストレス、恐れ、不調和、平和のない生活は、永遠に続く静けさと喜びに変わるでしょう。

ありがとうございました。

忘れられない物語

「再会の物語」

昔、小さな男の子が父親と海岸で遊んでいた。父親は少年が砂の城を建てるのを手伝っていた。突然、珍しい物が男の子の注意を引いた。男の子はそれを捕まえようと走り出した。しかしそれに近づこうとすると、それは遠ざかる。男の子はひたすら走ったが、それはどんどん遠ざかっていく。

しばらくすると男の子は疲れて立ち止まり、父親のことを思い出して振り返った。なんて遠くまで来たのだろう！男の子は追いかけることに飽きて、砂の城を作っていた場所まで駆け戻った。するとそこには何もなかった、砂の城も、そしてお父さんも。男の子はショックを受けた。

あっという間に涙があふれ、男の子は泣きじゃくった。「お父さん、お父さん！どこにいるの？どこにいるの？」

波の音だけが、誰も理解できない言葉で呼びかけに答えてくれた。だんだん

と日が沈み、あたりは暗くなった。男の子はどこへ行けばいいのか分からない。どこにも人っ子一人いない。

「父さんはどこ？ どうして僕を一人にしたんだろう？ 父さんはどこへ消えたの？」——男の子はだんだんと眠気に襲われ、砂の上で横になった。

ほどなくして肩をたたかれるのを感じた。優しい感触。男の子が目を凝らすと、暗闇の中に、ひげを生やして輝く眼をした堂々たる姿の老人が立っていた。彼は小さな男の子の手を取って言った。「おいで、おちびさん、おいで。お父さんのところに行きたくないかい？おいで、おいで」

男の子はこの老人を好きになった。まるで何かに魅了されたかのように。老人のキラキラした眼のせいか、愛に満ちた笑顔か、それとも周りの平安と喜びのオーラのせいだろうか？

とっくに老人の後をついていきながらも「本当にお父さんのところに連れて行ってくれるの？」と尋ねた。

老人は何も言わなかった。安心させるような微笑みを浮かべて、男の子の手を握った

とても長い散歩のように感じた。それから突然、自分の家の玄関先に立っていることに気づいた。男の子はドキドキしながら、ドンドンと力強くドアを

ノックした。ドアが開くと、そこには父親が立っていた。

「お父さん、お父さん、帰ってきたよ！」と男の子は興奮気味に言った。父親は息子を腕に抱き上げ、キスを浴びせ始めた。

驚いたことに、老人はどこにも見当たらなかった。さらに驚くべきことは、男の子が老人を探す必要を感じていなかったことだ。男の子はあることに気づいたのだ。父親を見るとすぐに、父親が老人に扮してやって来のだということが分かった。その出来事はすべて、父親が子供と一緒にやりたかったゲームの一部だったのだ。

シュリー・ラーマクリシュナは、「神ご自身が私たちのグルに扮して私たちのところに来てくださるのだよ」とおっしゃった。

今月の思想

誰の計画にも冷や水を浴びせてはいけません。批判は一切やめたまえ。うまくやっっていそうなら皆を助け、道を誤っていそうならば、優しく間違いを指摘しなさい。お互いを批判することが諸悪の根源なのだ。それが組織を潰す主要な原因である。

…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp